



Short ショートコメント

★★★★

おまえの親になつたるで (テレビ大阪 ドキュメンタリー映画)

2023年／日本映画

配給：／94分

2024(令和6)年3月2日鑑賞

第七藝術劇場

Data 2024-23

監督：北岸良枝

撮影・編集：テーク・ワン

プロデューサー：山田龍也

(テレビ大阪)／花本

憲一(テレビ大阪)

ナレーター：竹房敦司

みどりこ

何とも強烈な大阪弁のタイトルだが、こりゃ一体何の映画？それを理解するためには、まずは「日本財団職親プロジェクト」の勉強から！こんな発想は、まさに大阪特有のものだろう。

本作の主人公・草刈健太郎氏がこのプロジェクトに参加したのは一体なぜ？彼の妹さんはなぜ夫に殺されたの？その犯人は今アメリカで服役していたが、
“仮釈放”の報に接すると、草刈さんは……？

「袴田事件」の再審請求も大変な問題だが、本作からも“人間の業(サガ)”のあり方をしっかり学びたい。

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*

◆本作のチラシには、「なんで……『妹』を殺害された俺が」「反省はひとりでもできるが、
更生は一人ではできないー」「前代未聞！刑務所・少年院で先行上映。」の文字が躍っている。

◆そして、本作のストーリーについては次のとおり紹介されている。すなわち、

妹を殺害された兄の「葛藤の10年」

自分の家族を殺した犯人を許せますか？

親からも、社会からも見捨てられた「元犯罪者」に温かい手を差し伸べられますか？

「なんで……俺が犯罪者の面倒を見なあかんねん！」

しかし、男は差し伸べ続けている。

つかんだその手を離さない。

—— そのわけとは ——

ふたつの問題と向き合い、自問自答しながら生きる……

加害者と被害者の間で闘ってきた、男性の10年間に密着したドキュメンタリー

10年前、関西の中小企業7社が集まり、あるプロジェクトが発足した。
元受刑者に住まいや仕事を提供し、再犯を防ぐ「日本財団職親プロジェクト」。
受刑者の半分が出所しても仕事や居場所がなく、再び罪を犯していた社会問題に立ち上
がったのだ。
しかし、参加者の中にひとり複雑な思いを抱えた男がいた。
大阪の建設会社・社長の草刈健太郎さん・・・
大切な妹を殺された悲しい過去があった。

元受刑者を相手に、**冷静な気持ち**でいられるのか？

当初、活動に気が進まなかつた草刈さん。
少年院を出たある青年との出会いをきっかけに、のめり込むように全国各地の刑務所・
少年院を訪問し、多くの元受刑者らに手を差し伸べてきた。
窃盗・薬物・詐欺など再び、犯罪に手を染める者たち・・・
草刈さんは親のように見守り続ける、「心を鬼に、仏にしてー」

◆本作は、テレビ大阪ドキュメンタリー映画だが、そのドキュメンタリー映画を監督した北岸良枝氏は私の知人の関係者だったため、本作を紹介され、十三にある第七藝術劇場まで赴くことに。近時、袴田事件の再審請求を巡ってテレビ放映されたドキュメンタリーフィルムを観たが、この手の映画は、どう見てもどうにも重くなってしまうもの。それは仕方がないが、さて、本作は？

◆そう思って興味深く、満席の中で鑑賞したが、なかなかよくできていた。ただし、弁護士の私は次の2点が気になった。

その第1は、本作は草刈健太郎氏が、アメリカで服役中のチェイスの仮釈放の情報を得たところからストーリーが始まるため、チェイスの殺人事件の裁判に関する情報が全く描かれていないことだ。そのため、チェイスの仮釈放を巡って、彼の殺人の動機についての説明や謝罪の有無が問題提起されるが、本来それは裁判の場で何らかの結論が得られていたはずなのでは・・・？

第2は、アメリカの仮釈放の制度がどう構築されているのか、またそれは日本の仮釈放の制度とどんな異同があるのか等について、明確な説明がされないことだ。

この2点は、本作の出来に直接影響するものではないが、あくまで弁護士の私が気にな
ったという意味で指摘しておきたい。

2024（令和6）年3月14日記